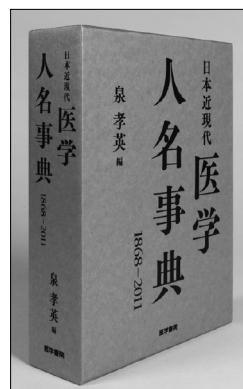


『日本近現代医学人名事典』 人から人に伝えられた 145 年の医療史を紡ぎ、 未来へ

編：泉孝英／定価：12,600 円（本体 12,000 円＋税 5%）
発行：医学書院／TEL：03-3817-5657



明治から平成へと移り変わった時代のなかで、医学・医療の進歩は目覚ましいものがあります。そしてそこには先人の業績を引き継ぎ、さらに発展させてきた人々の足跡があります。

最近、精神科医の森田正馬の手になる『根岸病院看護法』について調べています。この本は明治41年に著わされたものです。本の内容は、看護法一般を述べ、そのうえで精神病患者の看護の要点が著わされています。わが国最初の精神科看護書は明治34年に榑保三郎の書いた『癲狂院における精神病看護学』であり、その後明治35年に門脇真枝著、片山国嘉『精神病看護学』、明治41年に清水耕一著、二宮昌平編、呉秀三、田沢秀四郎編『新選看護学』があります。

森田正馬は帝国大学を卒業し、明治36年より東京慈恵医院医学専門学校の教員として巣鴨病院で学生に講義をし、明治39年から根岸病院院長として診療に関わり、その2年後に『根岸病院看護法』が書かれたのです。この本を森田正馬が書くにあたって影響を受けたと考えられる人を調べる目的で本事典を見始めました。森田の師呉秀三、青山胤通から始まって、片山国嘉、富士川游、榑俣、榑保三郎、門脇真枝、石田昇、清水耕一、高木兼寛、中村古狭、松村清吾……と調べました。結果は、一人を除いて業績を知ることができました。そのとき、編者が14年間かけて編集された、

本書の深淵にふれた思いがしました。事典には生死の年が最初に書かれていますので、森田正馬との関係を探るうえで参考になりました。と同時に時代背景が浮かびやすかったです。また、人ごとに抽出されている文献は人物像に迫っていく活動のヒントとなり、今、私はいつ果てるともない思索への旅を楽しんでいます。

本書は、「医学」人名事典と銘打たれています。が、「医学・医療」の発展に貢献した3762名（故人）を、医師、看護師、薬剤師、療法士、検査技師など医療職に限らず、社会事業家などからも選定しています。看護の立場から本書をみますと、105名の先人たちが載っていました。これは過去に類例がない規模になっているのではないのでしょうか。そこで【看護師】の所だけを抽出して読んでみました。そこには看護が社会のなかでその役割を果たしながら発展している現状に多くの先人の働きがあったことが示され、看護界における歴史の一端を知ることができます。

本書を読み進むうちに、“実は、先人の志を詳らかにして次世代につないでいくのは、読者自身の責務”と語りかけられている思いがします。

最後に、膨大な作業を経て810ページにまとめられた本書は、その過程を包み込み、手に取りやすい重さとするきな装丁に仕上がっているのも嬉しいことです。